

西表島のパナリ焼

瑞慶山 昇

はじめに

平成10年度から平成11年度にかけて、西表島のパナリ焼について調査を行った。パナリ焼はその土味や焼き、素朴な形態などの魅力から愛好家が多く、八重山を代表する焼物としてよく知られている。パナリ焼は県内外にかなりの数が現存しているものの、その起源についてなど多くがほとんど分かっていない。今回の調査は西表島のパナリ焼の確認を目的として行った。

調査地域

調査は主に大原で行ったが、祖納や上原でも所有している方がいるとの情報があり、確認調査を行った。また古見の海岸にパナリ焼の欠片が、多数散乱しているとの情報もあり調査を行った。その他にもパナリ焼に関する幾つかの情報があったが、残念ながら全てを調査することは出来なかった。

大 原

パナリ焼の名称が、八重山でパナリと呼ばれる新城島からきていることや、新城島で大量のパナリ焼の欠片が確認されていることなどから、新城島でパナリ焼が焼かれていたことは確かである。大原は新城島から移り住んだ人達の集落である。そのためパナリ焼を所有している方がいる可能性が高いと考えた。調査の結果、竹富町離島振興総合センターに、二点のパナリ焼が保管されていた。また個人で所蔵されている方が幾人かおり、三点が確認できた。いずれも所蔵するに至った経緯は不明であった。大原の方の話では、数年前まで庭先でパナリ焼の壺や、火取などが普通に見られたとのことである。現在見られなくなつた理由は、もともと低温焼成によるもろい土器質であるため、風化し破損して捨てられたためだと考えられる。大原では合計五点のパナリ焼を確認した。その他にも二点のパナリ焼を所有している方がいたが、直接確認することはできなかった。また、近年まで所蔵していたパナリ焼を、那覇市在住の収集家に譲った方がおり、那覇市でそのパナリ焼一点を確認できたため、西表のパナリ焼として図版に掲載した。

古見の古墓群

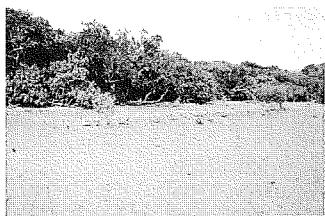
1980年に沖縄県教育委員会が発行した、沖縄県文化財調査報告書第29集「竹富町・与那国町の遺跡」によると、後良橋北西の山林中の古墓群で、大きな石灰岩を方形に積み上げ、石灰岩の蓋石をのせたミヤーカ形式の古墓が数十基存在していたが、開発青年隊の訓練所建設で大部分が、破壊されてしまったとのことである。また、同様の古墓群がカサ崎近くにもあるが、牧場建設でかなり破壊されているとある。それらの古墓からは、パナリ焼等が副葬品として見つかっている。大原在住の方で以前に十点近くのパナリ焼を所蔵していた方の話では、古見に住んでいた方が工事のため、カサ崎近くの古墓を壊したところ、パナリ焼が出てきた。その中のパナリ焼数点を、譲ってもらったとのことである。沖縄県立博物館が1984年に発行した「沖縄県の考古資料（土器）目録」に、その方の所蔵していたパナリ焼のリスト、及び写真が掲載されている。写真に掲載された二点は、「底に穴あり」の記載があり、副葬品に使用されたものと考えられる。おそらく牧場建設工事で壊された古墓から出たものであろう。出所が明確な数少ない貴重な資料である。今回の調査では、残念ながらカサ崎近くの古墓群の現状を確認することは出来なかった。

祖 納

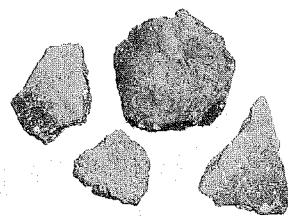
祖納の集落の近くに、早稲田大学調査団（1960年）発表の八重山遺跡編年表で、第三期に属する上村遺跡がある。沖縄県教育委員会が過去に発掘調査を行ったところ。土器や陶磁器片に混ざって、パナリ焼の欠片が発掘されている。それは上村遺跡に暮らしていた人達が、パナリ焼を使用していたことを示している。このことから、上村遺跡に隣接する祖納に、パナリ焼が残っている可能性があると考え、調査したところ二点が確認された。しかし残念ながら、二点とも所蔵するに至った経緯を明確に知ることが出来なかった。上村遺跡に関連するパナリ焼であるかどうか不明である。この地域では十分な調査時間がとれず、他にも所蔵している方がいるとの情報があったが、確認することができなかった。

古見の海岸

沖縄県文化財調査報告書第29集「竹富町・与那国町の遺跡」によると、古見集落から平西島へ突出した丘陵とその傾斜地に形成された遺跡で、外来陶磁器や土器等が海中まで散布している。これが古見赤石崎遺跡である。とあることから古見集落の海岸に見られる土器片や陶磁器片は、古見赤石崎遺跡の遺物の一部であると思われる。海岸には近世の陶磁器片に混ざって、赤褐色の土器質の欠片が散乱する。土器と思われる欠片は、中央が黒っぽく両端が赤褐色で胎土に大量の混入物があり、パナリ焼の特徴と一致している。



古見の海岸。岸近くに土器や陶磁器片等が散乱している。

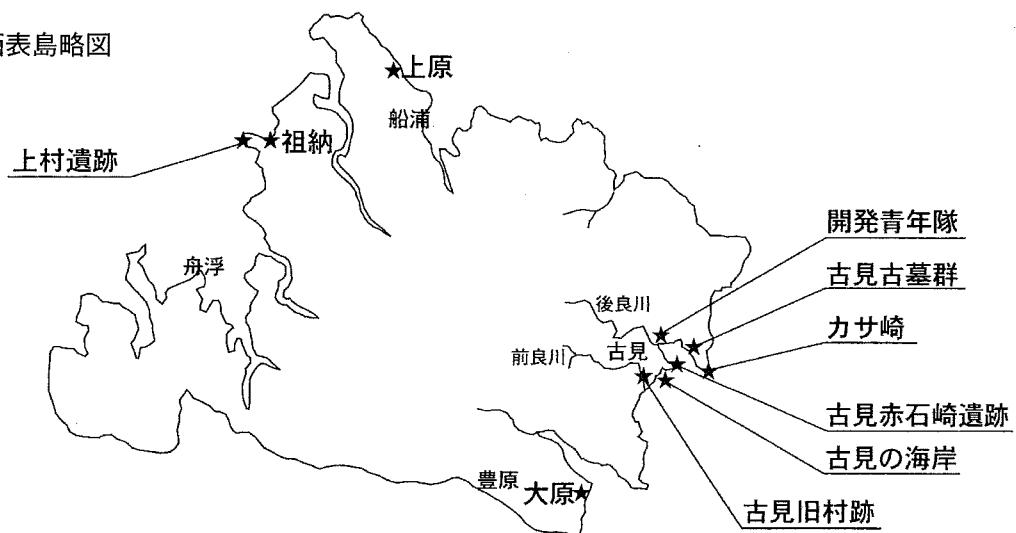


表面採取されたパナリ焼きと思われる欠片。



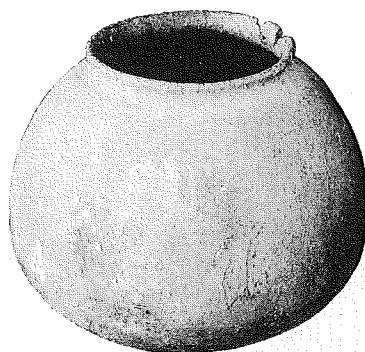
欠片の断面。白い混入物が大量に含まれている。

西表島略図



資料図版

本報告書では個人所蔵者への配慮から、個人の氏名及び住所は明記しないこととした。以下、西表島で確認できたパナリ焼（那覇市在住の収集家が、近年西表島から収集した資料1点を含む）を図版で紹介する。尚、判のある資料は拡大写真と図で示した。

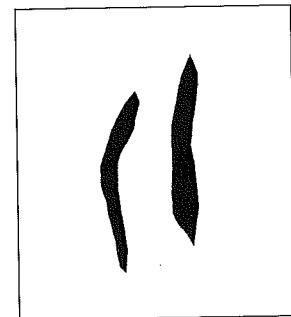


資料1. パナリ焼壺

器 高：28cm

最大径：34cm（胴部）

備 考：判有り、底に約5cmの穴有り。叩き等により成形後、へら叉は指を使って撫で仕上げ。底部は丸く削りとられている。胎土に混入物多数。全体に白い石灰質付着。回転台を使用したものと思われ、薄く丁寧な仕上げである。口の部分の小さな欠けと胴の小さな剥離（焼成時にできたものかもしれない）以外は良好な状態である。個人所蔵。

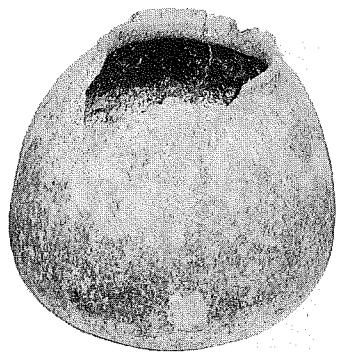


資料2. パナリ焼壺

器 高：30cm

最大径：30cm（胴部）

備 考：判無し、底部が約18cm大に破損している。口縁の一部破損。底部は丸く削り落とされている。荒めの土を使用しており、内部は撫で仕上げされている。混入物が多く表面からもはっきりと見える。赤褐色。竹富町教育委員会所蔵、竹富町離島振興総合センター保管。

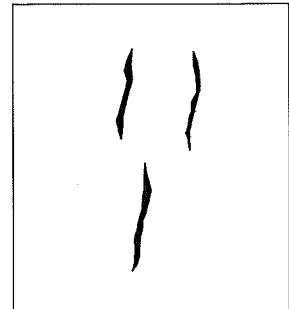
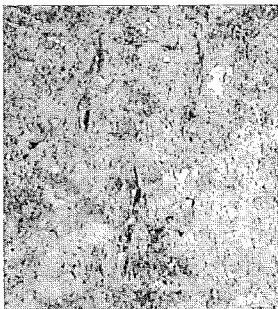


資料 3. パナリ焼壺

器 高: 28cm

最大径: 32cm (胴部)

備 考: 判有り、口縁部の一部破損。底に約 1 cm の穴有り。口縁部分から底の中央部分にかけて、細いひび割れ有り。叩き等で成形後、へら叉は指を使って撫で仕上げ。底部は丸く削られている。荒めの土を使用、厚めで重い。口縁部の破損箇所断面から、混入物の量の多さがわかる。表面は黒っぽく胎土は赤褐色。個人所蔵。

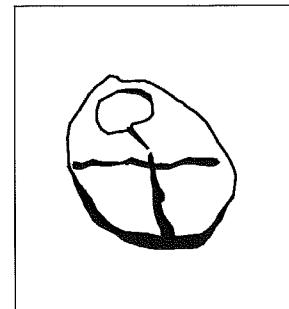


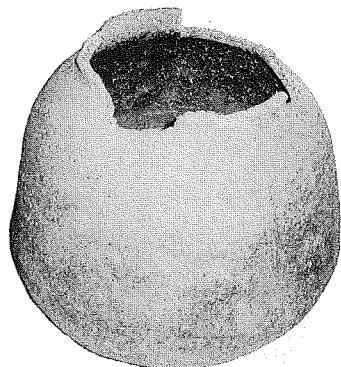
資料 4. パナリ焼壺

器 高: 25cm

最大径: 31cm (胴部)

備 考: 判有り、底に約 1 cm の穴有り。口の部分から底の中央部分までひび割れ有り。成形後へら叉は指を使って撫で仕上げ。底部は丸く削り落としてある。荒めの土を使用、厚めで重い。混入物が多く、器物表面は混入物が剥がれ落ち、無数の小さな穴となっている。個人所蔵。



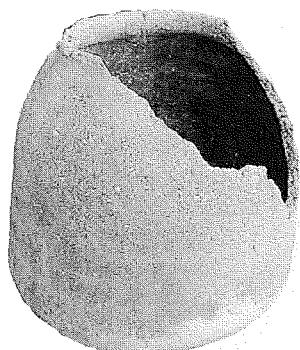
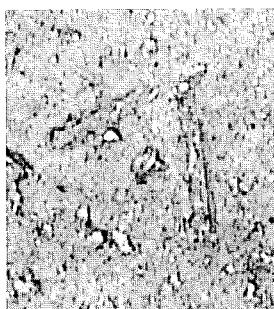


資料 5. パナリ焼壺

器 高：27cm

最大径：31cm（胴部）

備 考：判有り、底に約1cmの穴有り。口縁部の一部分破損。叩き等で成形後、へら叉は指を使って撫で仕上げ。底部は丸く削り落とされている。荒めの土を使用、厚めで重い。混入物が多く赤褐色。個人所蔵。

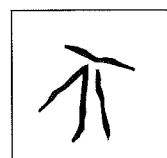
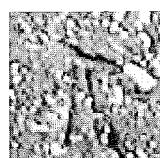
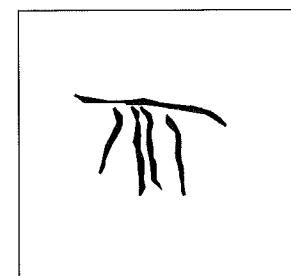
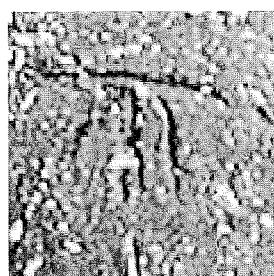


資料 6. パナリ焼甕

器 高：39cm

最大径：36cm（胴部）

備 考：判有り（二箇所）。内部は撫で仕上げ。底に約2cmの穴有り。口縁部から胴部にかけ大きく破損。成形後、へら叉は指を使って丁寧に撫で仕上げられている。底部は丸く削り落とされている。細かな土を使用、薄く軽い。混入物が多く赤褐色。底部に白い石灰質付着。個人所蔵。



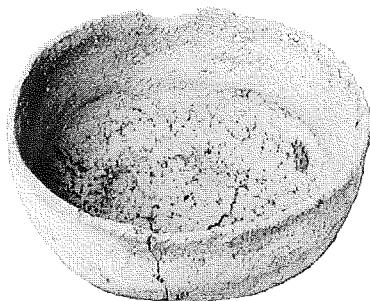
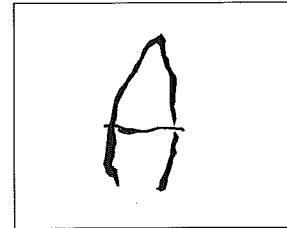
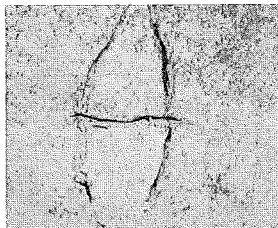


資料7. パナリ焼甕

器 高：40cm

最大径：30cm（胴部）

備 考：判有り。底に約1.7cmの穴有り。口縁の一部が小さく欠けている以外は破損がない。細かな土を使用し内部は撫で仕上げで、底部は丸く削り落とされている。回転台を使用したと思われ、口縁部から胴部へかけて滑らかな曲線が見られる丁寧な仕上げである。混入物が多い。表面に薄く白い石灰質が付着している。胎土は赤褐色。竹富町教育委員会所蔵、竹富町離島振興総合センター保管。



資料8. パナリ焼浅鉢

器 高：15cm

最大径：34cm（口縁部）

備 考：判なし。底に約0.7cmの穴有り。口縁の一部が欠けている。口縁部から胴の部分へひび割れが縦に入っている。底に約4cm大の破損部分があり、さらにその箇所から底の中央へ細いひび割れがのびている。荒めの土が使用され、内外とも指撫で仕上げであるが、表面はあまり丁寧には仕上がってない。個人所蔵。

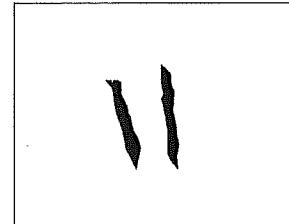


資料9. パナリ焼鉢

器 高：28cm

最大径：34cm（胴部）

備 考：判有り、底に修復の跡と見られる箇所がある。口縁部分はやや楕円形で、内側はかなり光沢がある。破損箇所は見られない。内部は撫で仕上げで底部は丸く削り落とされている。混入物が多く器物は厚く重い。大型のパナリ焼で、赤褐色。個人所蔵。



資料10. パナリ焼鉢

器 高：35cm

最大径：44cm（口縁部）

備 考：判無し、口縁部分が胴の回りより大きく作られている。部分的に光沢がある箇所が見られる。破損箇所は見られない。内部は撫で仕上げで底部は丸く削り落とされている。混入物が多く、胴中央よりやや下部に、帯状に白い石灰質が付着している。大型のパナリ焼で、バンドゥガーミ（水瓶）に使用されていた。どっしりとした重量感が感じられる。個人所蔵。

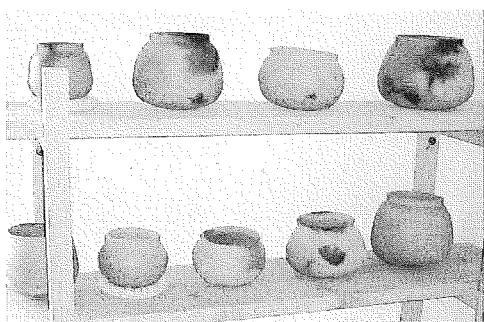
おわりに

これまで幾人かの研究者や陶芸関係者達が、パナリ焼の復元を試みてきた。彼等の努力によって、パナリ焼の成形方法や焼成方法などが、しだいに明らかになりつつある。西表島では、現在大小四つの窯元があり、それぞれ特色ある作品を制作している。その中にはパナリ焼に魅了され、試行錯誤を繰り返しながら現代のパナリ焼制作に、情熱的に取り組んでいる陶芸家もいる。今回の調査では、過去に沖縄県が行った調査資料をもとに、西表島に残るパナリ焼の現状確認を行ったが、時間の制約等もあって細かな調査を行うことが出来なかった。

西表島の陶芸家によって制作された、現代のパナリ焼。



「西表焼青峰窯」



「ひぬかん陶房」

〈参考文献〉

石垣市立八重山博物館 「石垣市立八重山博物館所蔵目録～第三集～陶磁器I（パナリ焼）」

1995年3月

沖縄県教育委員会・沖縄県文化財調査報告書第10集「沖縄県の遺跡分布」1977年3月

沖縄県教育委員会・沖縄県文化財調査報告書第29集「竹富町・与那国町の遺跡」1980年3月

沖縄県立博物館「沖縄県の考古資料（土器）目録」1984年3月

沖縄タイムス社「沖縄美術全集 1 陶芸」1989年11月

やちむん会「図録 沖縄の古窯」1979年10月